

『九州の社会科教室』 1966年11月（東京書籍）

教材研究のあり方

プログラム教育研究所長 矢口 新

教材研究という言葉の中身はいろいろあるようである。それは教材という概念がまちまちに使用されていることによると思われる。まず教材研究のいろいろを考えてみよう。

教師が教材研究をするというとき、生徒にどういふことを教えるか、どういふ知識を与えるかということを研究することだと考えている人がいる。そういう人はその事柄、たとえば小学校の世界の国々ならその世界の国々について詳しいことを勉強することになる。中学校の歴史的分野についてたとえば、何時代の社会事情を研究することになる。これはつまり教師の社会科の研究である。内容研究というような言葉でもよばれることがある。

生徒に社会のことを勉強させる場合、教師がまず研究しておかなくてはならぬことは当然である。しかし教師が勉強したことを、そのまま与えればよいと考える考え方の上に立って研究するのは、本格的に教師の立場で教材を研究していることにならない。しかしこういう考え方はわが国では一般的である。というのは社会のことを勉強した人は、社会のことを教えることができるというきわめて単純な考え方があるのである。その道の研究者はその道のよき教師であるという考え方にもつながる。しかしこれは実は最低の条件であろう。十分な条件だとは絶対にいえない。もしこういう考え方を認めるなら研究はすべて教材研究ということになるが、それでは教材研究ということを特にいう必要はなくなってしまう。教材を研究するとは、そういう研究一般をいうのではないと考えるべきであろう。

しかしわが国の教材研究という概念には、そういう考え方が強いのであって、教える事柄の研究さえ

していれば教えることができるという考え方がある。極端にいえばすぐれた大学教授はすぐれた小学校教師であるという錯覚があるのである。ここまでいえば、だれでもそんなふうには考えていないというけれども、実際にはそうなりがちなのである。それは教材研究ということがどういふことをするべきかということがはっきりしていないこともあるが。

また知識内容の研究もこれでよいということはない。いくらでも研究しようと思えば研究することはあるし、また必要でもある。そうするとついそれに引きずられて、それにとどまってしまうことになる。授業の研究會などでも、話はそちらのほうへいってしまつて、授業の話より、社会そのもののつかみ方の話などがおもに話し合われるなどということもある。もっといえば、教師がどれだけ物知りかというようなことが問題になるのである。物知りを育てるのが教育だというような考え方が日本にはあるのである。それは社会科が、いろいろ理念はいわれながら、結局は、暗記物的教科となっていることとも関係があるのである。いな関係があるどころか、そういう根底の上に社会科が存在しているといつてよいのである。この意味では教材研究を考えるにも、社会科の教科の本質から考えていかなければならないということになるのである。このことについてはあとで考える。

最近はやりの構造化の研究などというのも、もしそれだけにおわれば、やはりこの系統に属するものであって、要するに教師の社会研究であるにすぎない。教師の社会認識といつてもよいのである。それは生徒にどう教えるかを目的にしているのであろうが、構造化という段階までは教える事柄をならべたというか、教師自身の構造的認識を表現したという

にすぎない。それがそのまま教材研究となるという考え方に問題があるのである。教師がよく社会を認識すればよく生徒に教えられるということであるにすぎない。それは少しもあやまりではないが、それはあたりまえのことであって、教材研究の段階に進んでいないというべきであろう。

○ ○ ○

教材というのは教科書だという考え方は昔からある。教科書というのは形としてみれば、教具であるが、その中身に目をつければ、教育するための材料が盛られている。教育するための材料というように簡単にいったが、そこにも考え方はいろいろある。そこに書かれてある事柄をおぼえるのが社会科の教育だという考え方もある。

たとえば教科書をみると、東北地方の農業は米作中心の農業である。農家は米をつくってその収入を得ている。東北地方では米はどの地方でとれるうんぬんといったことが書いてある。これは本当かどうかは教科書だけではわからないのである。もし教科書をおぼえろといえ、これは信じろということとたいしてちがわないのである。しかし最も素朴な教育は、信じろという教育で、そういう教育も現にないわけではない。しかしそれは今のところ論外としてもよいであろう。というのは、そういう教育なら、何も教材研究などということにははじまらないといってよいであろう。

教科書に書かれてあることは、理解の目標であるから、教師がこれを補って、そこに書かれてあることを理解させるのが教育だと考える考え方は一般的である。つまり教科書に書かれてあることは、到達目標だというようにいってもよいかもしれない。前にあげた例を使っていうなら、東北地方の農業は米作中心の農業だと教科書に書いてあるだけなら、これは一種の結論である。そういう結論が出るにはその過程があるはずである。その過程がわからなくてはこの結論はわかったとはいえない。そこに教師の役割がある。教師がこれをもっと具体的に、そういう結論が出る過程を説明してやることである。

こういう立場に立って、教科書を調べてみるという

ような意味の教材研究がある。これは現実的な立場でおこなわれる教科書研究であって、かなり一般的に教材研究という概念でおこなわれていることだといってよい。こういう教材研究の場合にはたいてい補助教材の研究も伴うものである。教科書の内容を生徒にわからせようというように考えるとき、教師がただ説明するというしか考えない人もいるけれども、最近では多少は進歩して視聴覚教材などを使用してやるのがよいという考え方の先生も多くなった。教科書以外の教材をどう使用するかというようなことは、教科書に書かれてある教材を調べて、それとの関連で考えられることである。そういう意味で教科書の研究というか、教科書の中身をしらべることとそれ以外の教材をどう使用するかというようなことは、形影相伴うものだといってもよいであろう。

この考え方は素朴ではあるが、教育者の教材の研究という点では前の立場よりも進んでいるといつてよい。とかく有能な教師はこういうことをやりたがらないで、前にあげたような立場で研究をやりたがるが、必ずしもそれがよい研究の方向だとはいえない。前のような立場の研究はむしろ教科書の執筆者にまかせて、分業にするのがよいのではないか。もちろんやっていけないというわけではない。大いにそういう研究も必要なのだが、おのずから分業と協業の関係があつて、みなで協力して教育をよりよいものにするように考えるべきである。教師の立場として基本的に何をすべきかが見失われてはならないということである。

○ ○ ○

上に述べたような教科書および補助教材の研究というのは、生徒にどのように教材をならべて、結果として教科書に書いてあることをわからせるかということに目標がおかれている。結果に到達するために、教材をどう提出するかということが問題になるのである。その意味で教材の提出の順序というか、どういう教材をどこで提出して生徒にわからせようとするかという研究ということになるのではなからうか。

これはある意味で教材研究という言葉にふさわしいといつてよいであろう。しかしこの場合非常に微

妙であるが、教材というものの考え方について変化があるのである。教科書の中身が教材であるというとき、教科書には結論のようなことが書かれてある。補助教材を使ってその結論に到達するように説明するというときのその教材は必ずしも教科書の中身と性質はおなじではない。同じく教材という言葉が使われるけれども、非常に微妙なズレがあるのである。

ここで教材という概念を明らかにしておかなくてはならない。それには教育というものも考えてみる必要があるのである。社会科ではとくにそうであるが、これまで圧倒的に、知識を与えるという考え方が強かった。ちょうどコップの中に水でも入れてやるように、知識を頭の中へつめこむという考え方がある。つめこむとか与えるとかという言葉を使ってものをいうことが、そういう考え方であることの証拠である。これがまずおかしい考え方である。これを改めなければならないのである。

一方社会科とは、社会を見ることを習得するというようにいわれている。これは正しい考え方であるが、その見ることを習得する、頭脳がおぼえるというのはどういうことであろうか。そのところがはっきりしないので、それ以上に進まないのである。それどころか結局つめこむ式の考え方にまきこまれてしまうのである。

社会を見る訓練とは、社会を見る回路をつくることだというように考えたらよい。この回路というのは通信機の回路と比べながら考えたらわかりやすいであろう。この回路を脳の中へつくるのが教育であって、この回路をつくるには、自分で社会を見て、自分でこれは何々であるといってみるというような、行動をしなければならないのである。この点について今はページ数がないので詳しくいえない。脳科学を研究されたい。

さてここで教材ということが新しい意味をもってくる。教材とは、昔のように頭につめこむものではなく脳回路をつくるための材料なのである。教育とはあくまで人間を育てることで、ここでいえば、社会を見る脳回路をつくってやることである。そのために脳が活動をしなくてはならないが、その活

動の相手となるのが教材なのである。

○ ○ ○

さて教材研究というのをこのような立場で考えると教材研究の前に、生徒にどのような回路が必要かをまず明らかにしなければならない。前の例でいうならば、東北地方の農業は米作中心であるというのは結論であって、生徒の立場からいえば、それは自分でそういう結論を出すことができることが教育の目標である。ただ言葉を暗記するのではなんにもならない。東北地方という一つの地域を見て、その農業を見て、その結果結論するのである。どのように見るのか、そこに見る回路が備わらなくてはならない。農産物の統計を見る。そこから米が最大のものだという結論を出す。そのプロセスがたどれるような回路を脳に備えなければならない。

このような回路が必要だということになれば、この回路をつくるためにはどうするか。回路というのは、自らその回路をたどって身につけるのである。材料を見て材料を分析し、整理し、総合判断して結論を出すのである。そこに教材が必要となってくるのであり、その教材の種類や、使われる順序も明らかになるのである。

このように考えると教材研究のあり方もはっきりする。具体的に述べると、教科書には結論しか述べられていない。一文一文が結論でしかないのである。脳の回路という点からみると、全く飛躍した結論の羅列なのである。その一文一文を分析して、どういう過程をへて、そういう結論が出てきたかを分析してみるとよい。そこに生徒に何をさせなければならぬかが明らかになる。というのはその過程を明らかにすることによって、脳がどれだけの回路をもてばその結論が出るかが明らかになるからである。そこで、その回路をもたせる材料を準備する。こうして教材がととのえられる。

この教材を生徒にふれさせて、生徒に自分で結論を出させる。そこに生徒の脳に社会をみる回路が出来あがってくるのである。

教材研究はこのようにして、全く考え方を改める必要があるだろう。